

1994年12月号
情報処理学会誌「巻頭言」

学会誌編集長からの手紙

弓場敏嗣

3万2千人の会員のみなさま、歳の暮れのお忙しい毎日をお過ごしでしょうか？私は、昨年5月以降、学会誌の編集に携わっております。毎月の発行のために、140余名の編集委員が、6つの作業部会に分かれ月に1度の会合をかさねています。各編集委員は、多くの会員にとって魅力的な記事が頻度多く現われるよう努力しています。編集委員の仕事は、広い読者層に興味を持っていただけそうなトピックスを選び、原稿を執筆していただける方を見つけだし、でき上がった原稿を一般会員の立場で下読みすることです。よりよい学会誌の実現に向けて努力を重ねてはいるのですが、なかなか一朝一夕には改善されません。よりよい学会誌についてのイメージが、必ずしも一つにまとまらないこともその一因です。

さて、この場を借りて、二つのことをお願いしたいと思います。一つは、「読み手」としてのみなさまに対してです。新年1月号から、本会記事／会告欄の装いを少しばかり新たにします。会誌の最後のページに「会員の広場」、「編集室」、「事務局だより」の欄をもうけ、会員と編集委員、事務局とのサロンの交流の場を目指します。すでに学会誌モニタ制度によって、掲載記事に対するご意見は毎月モニタ会員から寄せていただいています。現在、掲載しているものは、その中から選ばせていただいたものです。モニタの方はもちろん、一般会員のみなさまからの、よりよい学会誌に向けた積極的なご提案およびご意見をお待ちします。電子メールでも受け付けております。

二つ目は「書き手」として、学会誌記事を執筆されるみなさまに対するお願いです。1年間に原稿を執筆される方は、延べ約200人にのぼります。この方々が学会誌の質と魅力をささえてくれているわけです。現在の学会誌の記事は、一般会員にとって難しすぎるという声が届きます。もちろん、記事によっては読み手に読む苦勞をしいるものもあってよいのですが、割合として現状は偏っているとの意見です。取りあげたトピックスが興味深くても、執筆者の自己満足的な書き方によって、難しく読者には手におえない記事になることもよく見られます。扱っているテーマが難しいことと、書かれた記事が難しく読みにくいこととは、本来関係はないはずですが。この辺りの改善を「書き手」のみなさまにお願いしたいと思います。

ここまで書いてきて、「巻頭言」の書き手としての自分を反省しています。このような事務連絡的な文章は、「巻頭言」としては格調が低すぎるのではないか、誰も読んでくれないのではないかという思いが勃然と沸き起こってきました。そこで話題を転換します。今年のノーベル文学賞は大江健三郎が受賞しました。氏は「文学ノート」（新潮社、1974 年）の中で、文学作品の推敲の有り様について論じています。作家は小説を書きながら、「読む人」として自分の小説を受けとめ、「読む人」としての批評を「書く人」の自分にむけて発してなくてはならないとしています。

…作家の肉体＝意識の準備体操は、まず「書く人」としての自分から、「読む人」としての自分を、つとめて独立させる方向にむけられねばならない。（略）われわれはすこし感情的に深く表現しすぎた手紙すらも、いったん書いてしまえば、早く封入しポストに投じてしまいたいという欲求にせきたてられる。（略）「読む人」としての作家は、それこそ自分の貝殻からはみだしている、グニャグニャの足を見つめる抵抗感を乗り越えて、制作途中の小説を読まねばならぬ。…

本誌の記事を「書く人」は、原稿のむこうに存在する不特定多数の他者としての「読む人」を意識することによって、何をいかに書くかについてもっと強い制約を受けねばならないという訳です。かくして、本「巻頭言」は、大江健三郎の威光を借りて少しは印象的になったでしょうか？